

横浜市立



中川小学校だより 9月

令和8年8月27日発行

学校教育目標 人・自然・まちとふれあいながら、自分を高める中川の子



努力や挑戦そのものを大切に

校長 東野 留美

夏休みを終え、学校に新たな歩みが始まりました。子どもたちはそれぞれに夏の経験を重ね、新たな目標や思いを胸に前期後半の学校生活を迎えています。地域のお祭りでは、多くの児童が参加し、楽しい夏の思い出をつくることができました。ご家庭や地域の皆様には、子どもたちが安全で充実した毎日を過ごせるよう温かく見守っていただき、心より感謝申し上げます。

さて、この夏休み中に、青少年読書感想文全国コンクール小学校中学年の部の課題図書『まだまだこれから』の作者である宇佐美牧子さんの講演を拝聴する機会がありました。

『まだまだこれから』の主人公は、水泳で思うような結果を出せず、弟に先を越されるなどの葛藤や挫折を経験します。しかし、仲間やコーチとの関わりの中で、努力することの尊さや喜びを実感しながら成長していきます。現役の小学校教員であり、二人のお子さんの母親でもある宇佐美さんは、「うまくいかなかった努力はむだなのだろうか」という問いについて子どもたちに考えてほしいという願いを込めて、この作品を書かれたそうです。

講演を伺い、私は子どもたちの「うまくいかなかった経験」について改めて考えさせられました。誰もが生きていく中で、思い通りになることもあれば、そうでないこともあります。この作品の主人公も、また、うまくいかなかったときの悔しさや悲しさ、情けなさを受け止め、整理し、再び一步を踏み出していきます。作者の宇佐美さんのお話から私は、自分自身と向き合うその過程こそが、子どもたちが大きく成長する機会になるのだと感想をもちました。自分と向き合うとは、失敗した自分を責めることではありません。悔しさや悲しさを受け止めながら、「自分は何を願っていたのか」「この経験から何を学んだのか」「次はどうしたいのか」を確かめることです。それによって、うまくいかなかった経験は、これからの自分を育てる経験へと変わります。だからこそ、学校では、うまくいかなかったことも含めて、子どもたちがさまざまな経験を通して成長できるよう教育活動の充実を図るとともに、「一生懸命取り組んだからこそ悔しいね」「頑張っていたことを知っているよ」と、努力の過程に目を向け、その頑張りを認め、励まし、自分と向き合えることを大切にしていきたいと考えています。また、挑戦する前から「どうせ無理」「やっても意味がない」と感じてしまう背景には、失敗への不安や傷つくことへの恐れがあるのかもしれません。「できなかった」という現実を受け止めることは、大人が想像する以上に苦しく難しいことです。そのようなときには、「大丈夫、見守っているよ」「困ったときは一緒に考えよう」「完璧でなくてもいいよ」と、子どもたちの背中をそっと押し、できることや得意なことを認めながら自信を育んでいきたいと思えます。

夏休み明けには運動会があります。子どもたち一人一人が目指したい自分を見つけ、その実現に向けて目標をもって取り組めるよう支えていきたいと思えます。そして、結果だけではなく、そこに至るまでの努力や工夫、挑戦そのものに目を向けながら、子どもたちの成長を温かく見守り、励ましてまいります。子どもたち一人一人が自分らしく挑戦し続けられる学校づくりを、これからも進めてまいります。引き続き、本校の教育活動にご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。